

半導体漫遊記

(85)

湯之上 隆

私は2003年11月

に同志社大学の教員となり、半導体産業の経営学研究を始めた。そのデビューの舞台は、

04年10月14日に開催された「ルネッサンスプロシエクト・シンポジウム」だった。

そこで、「日本半導体産業には過剰技術、過剰品質の病気があ

る。それ故、PC用DRAMを安く大量生産する韓国勢の『破壊的技術』に敗北した」と講演した。

ところが、この講演に対する日本半導体関係者の反応は、衝撃的だった。

「元社長 「日本半導体」の技術力は、実際に

かのごとく、私の果、何が起きたか？」

2004年10月14日、ルネッサンスプロシエクト・シンポジウムで講演する筆者

を割いて、私の講演内容に対する批判をまくし立てた。「日本半導体の技術力は極めて高い。日本は本物の技術力を持っている。湯之上は、私の言ったことと全く異なる」と。司会を務めた大学教授は「濃厚なあの常務が、あんな

なあの常務が、あんな体の技術力は、実際に

かのごとく、私の果、何が起きたか？」

2004年10月14日、ルネッサンスプロシエクト・シンポジウムで講演する筆者

日本半導体敗戦の主張

10年がかりで世論に

に熱くなったのを初めて見た」と言われた。

また、立食式の懇親会にて、ある半導体メーカーの元社長が私を呼び止め、ものすごいけんまくで、「お前の言ったことは全て間違っている」と叫んだ。

「お前の書いた、講演で話し、世論に問うてみようじゃないか。記事を書き、講演で話し、世論に問うてみようじゃないか。」

「おれの直心な決心をした。」

「あなたから、世論に問うてみようじゃないか。記事を書き、講演で話し、世論に問うてみようじゃないか。」

「おれの直心な決心をした。」

「あなたから、世論に問うてみようじゃないか。記事を書き、講演で話し、世論に問うてみようじゃないか。」

「おれの直心な決心をした。」

「あなたから、世論に問うてみようじゃないか。記事を書き、講演で話し、世論に問うてみようじゃないか。」

「おれの直心な決心をした。」

「あなたから、世論に問うてみようじゃないか。記事を書き、講演で話し、世論に問うてみようじゃないか。」

最近、知人から以下書かれているよ。この文章は私の本などを引用して日本半導体敗戦を論じている。

「この記事は、私の文庫を一切引用していい。」

「本来ならこの記事の著者にクレームをつけるところだが、それはやめた。なぜなら、私の主張は、引用文献を示すことなく記事に書かれてしまうほど、深く、広く、日本半導体業界に浸透したと思っ

たからだ。」

「デビュー戦から10年たって、私が主張する研究成果は、世論になったのだ。10年の苦勞は何とか報われた。次の私の仕事は、日本半導体産業再生への提言をすることだ。」

（微妙加工研究所・所長）

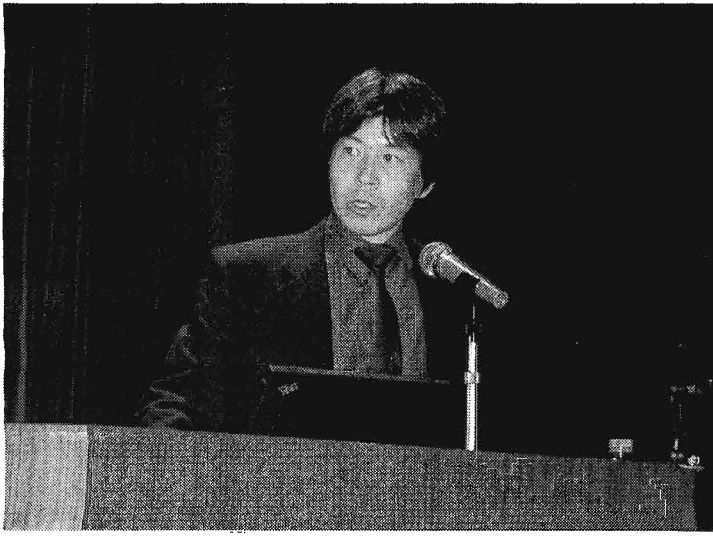
（微妙加工研究所・所長）

（微妙加工研究所・所長）

（微妙加工研究所・所長）

（微妙加工研究所・所長）

（微妙加工研究所・所長）



2004年10月14日、ルネッサンスプロシエクト・シンポジウムで講演する筆者

（微妙加工研究所・所長）